W.E.グリフィスと橋本左内

2017.5

(1)七十年目の墓参

福井市内の左内公園に立つ橋本左内の銅像の奥には左内の墓所があり、墓前に石碑が立っています。碑文は左内の自筆。処刑される前年（1858)、盟友の長谷部甚平に贈った詩が刻まれています。

常山之髪　侍中之血　日月韜光　山河改色　生為名臣　死為列星

昭和二年（1927）四月。半世紀ぶりに福井を訪れた W.E.グリフィスは、橋本左内の墓所にお参りしました。現在の左内公園です。その半年前、墓所に一基の石碑が建てられていました。グリフィスは碑文の英訳を、かつての生徒に頼みました。

The hair of Changshan, The blood of Shichung,

The sun and moon darken their rays,

Rivers and mountains change their colors.

While we live, act like the honorable subjects,

When we die, shine like the constellations.

義のために殺された唐の常山(Changshan)太守、晋の侍中(Shichung)たちの死に様が放つ不朽の光の前では、日月の輝き、悠久の山河の鮮やかささえ色褪せ、はかなく見える。自分も彼らの様に、生きては名臣、死しては名誉ある夜空の星となりたい。

グリフィス博士はこの詩をよんだ男に会ったことはなくとも、よく知っていました。半世紀前に福井でもっとも親しく付き合った友人が、橋本綱維（つなこれ)。左内の弟でした。綱維は医師になる前、世界を視野に航海術を学んだ幕末の志士でした。グリフィスの二歳年長、出会った当時三十歳でしたが、七年後に亡くなっています。

(2)明道館から、明新館へ

橋本左内はグリフィスが教えた福井藩校の基礎を築いた人です。藩校の名前は左内

の時代の明道館(1855～69)から、グリフィス在職時は明新館に変わっていましたが、変化は校名だけではありません。
　グリフィスの担当科目は“理化学”です。明治二年(1869)の学課表では「武学」の中に“軍用化学”“理学初歩”がありますが、グリフィスが教えた明治四年には、兵科とは別に「洋書」科が、「漢書」科と並んで設けられ、中学生（数え 17～20 歳）の初級に“綴字”や“文法”、上級に“理学”“化学”が配当されています。

　十代で大坂の適塾に留学し、福井藩において西洋学術を積極的に導入する先駆者となった左内ですが、日本人の教育の根幹となるのは武士道、という信念は不変でした。漢学者が実学を軽視して社会の役に立たず、洋学者が洋学のみに傾倒して西洋崇拝に傾くようでは、真に国を守れる人材など育てられない。世界に誇れる武士道に根差した精神の修養、伝統ある東洋の学識、更にその上に、世界の先端を行く西洋の技術に習熟する専門課程を修めたならば、いずれ日本人は国際社会で十分渡り合える。それは高すぎる理想というより、世界情勢に対する彼の怜悧な眼差しが見極めた、必然的要請だったのでしょう。

　武士としての学問。志あってこその学問。単なる教養人や口舌の徒を尊ばない教育。橋本左内は明道館に真の文武両道を求めました。しかし十九世紀の「武芸」はもはや刀槍では足りません。銃砲・火薬の製造、蒸気艦の運用、すべてに「理化学」が必要です。西洋科学の重要性は、左内の死後より広く認識されてゆきますが、洋学の主流は左内が学んだ「蘭学」から「英学」へと移ります。福井藩が米国から理化学教師「ウリヤム・イー・グリフヒス」を招聘したのは、左内が盟友村田氏寿（巳三郎）への手紙に「ロシアやアメリカから技術師範を五十人ばかり借りてきて、諸藩に学術稽古所を起こしたならば」と書いた、十三年後の事でした。

　藩校の現実は左内にとって、あるべき姿から遠く、形式と因習に沈んでいました。何より志、そして器量。彼が武士に求めたふたつを兼備する逸材、日下部太郎が福井藩から初めて海外留学したのは左内没後八年目の春。それから数年を経ずして結核に倒れた日下部の、死に臨んでの気高い姿に、武士道という異国の崇高な精神の存在を知ったグリフィスは、翌年福井に赴任すると積極的に日本人と交友し理解を深めます。

　藩の洋式船舶開発の功労者でもある佐々木権六たちの支援を得て授業に勤しんだグリフィスもまた、契約内容にとらわれることなく日夜教育に献身する、志の人でした。彼の生徒の内最も優秀な少年は鯖江のお寺の子、半世紀後に再会した恩師の求めで左内の詩を英訳する今立吐酔でした。左内は文と武の乖離を憂い、非常の際頼りになる人材は百姓・足軽からしか望めなくなると危惧しましたが、武士の世が廃藩とい

う形でグリフィスの目の前で終わる前に、すでに藩校明新館は武士以外にも開放されていたのです。身分にとらわれず、志と能力により登用される、教育と政治が一致した体制。左内がのぞんだ新しい日本を、グリフィスは祝福しました。

志と能力による人材登用。左内自身が、藩医の家に生まれ少年時代から蘭方医学の修行に精進しながら、その才能と溢れる志ゆえに、特別に医師としてではなく政務において登用された身でした。また唯一無二の人材であるがゆえ、藩校明道館の改革に携わる事一年で、江戸政界で奔走する主君松平慶永の側に必要とされ、福井を去りました。未練と高揚感。明新館での活動約一年で東京へ去ったグリフィスと、思いの重なる所があったかも知れません。両者ともまだ二十代、これからの人生の筈でした。

しかし、左内の人生はそれから二年しか残されていませんでした。将軍という最高指導者の後継を争う、政治における最も危険な工作活動の最前線に投入された、福井藩の最終兵器。暗闘の敗者となった藩は、満二十五歳の麒麟の首を失いました。

(3)教育者が向き合った東西の文明

左内は十代で、父を亡くしていました。後に残された三人の息子たち。長兄左内綱紀が藩医を辞した時、家職を継ぐ事を決意したのは末の弟、破魔五郎綱常でした。次兄綱三郎綱維もまた、航海術を学んで国を守りたいという、日下部と同じ志の人だったからです。グリフィスが来日した時には、結局優秀な藩医となっていた綱維でしたが、その経歴から察するに、アメリカからやって来た理化学教師の赴任を心待ちにしていたのでしょう。ふたりは福井で親密に交際し、グリフィスは橋本家を何度も訪れています。当時は兄弟の母梅尾も健在でした。廃藩で殿様が福井を去る時が、侍医綱維という“jolly friend”がグリフィスに別れを告げる時ともなりました。

綱維に連れられて行った、城下浜町（当館所在地）の芝居小屋で見た日本人の情念。使用人や生徒との生活、市井の人々との交流で知った日本人の日常と美意識。グリフィスは故郷へ宛てた手紙の中で、驚きと共に自らの職務への複雑な思いを吐露しています。

「日本は世界で最も幸福な人たちに満ちています。我々を熱に浮かれさせて不幸にしてしまう欲望を知る事なく、簡素に平和に生きています。・・我々の文明を醜く歪めた悪徳の多くが、ここには全くありません。キリスト教文明の祝福に伴って奢侈と浪費がもたらされ、彼らがこれまで無縁だった悪と悲しみを知ることになると思うと、厳粛なためらいを覚えます。・・」

近代西洋文明がもたらすであろう明と暗。福井における洋学教育の先駆者となった二人の青年は、共にその事に鋭敏でした。洋学を学ぶ前に東洋の学問を必須とした橋本左内。新渡戸稲造が著した『武士道』に「東洋と西洋との調和と一致の解決に対する著しき寄与」と紹介文を寄せた W.E.グリフィス。明新館理化学の基礎を築いた米国人教師が、廃藩で動揺する福井を去ってから五十五年の時が流れ・・今立吐酔が恩師と共に左内のお墓にお参りする三か月前、大阪での再来日歓迎会において老博士「グリフィス翁」が語った言葉が、新聞記事として残っています。「日本は余り急激に変わり過ぎた。今少し徐々に進んでは如何。殊に美術や精神的方面において古い日本の長所をもっと保存してもらいたい」と。

橋本景岳年譜

1834 (1 歳) 左内（綱紀）生まれる。生家は城下常磐町（福井市春山２丁目)。
父彦也（長綱）は藩医。母梅尾(21 歳)は蓑浦のお寺の娘。
1841 (8) 綱三郎（綱維）生まれる。
1845 (12) 破魔五郎（綱常）生まれる。
1849 (16) 大坂の緒方洪庵に入門（適塾)。前年、『啓発録』を著す。
1852 (19) 父を亡くし家督を継ぐ。
1854 (21) 江戸に留学（杉田成卿らに入門)。 日米和親条約。
1855 (22) 藩校明道館、お城の三の丸に開校。 藩医を免ぜられ、書院番として出仕。
1856 (23) 後ろ盾の鈴木主税（43）を亡くす。明道館に出仕。
1857 (24) 明道館に洋書習学所、開設。 江戸へ転任（侍読兼御内用係)。
1858 (25) 上洛し、将軍継嗣問題などで朝廷にはたらきかける。
主君松平慶永(31)、隠居謹慎。 江戸の藩邸で謹慎。
1859 (26) 江戸伝馬町に投獄され、五日後斬首。
1865 この頃、綱維、綱常、日下部太郎ら、長崎に留学。
1868 綱維、綱常、戊辰戦争に従軍。
1869 明新館、お城の下馬門内に発足。 綱常(25)、城下浜町に藩立の病院を開く。
1871 W.E.グリフィス(29)、明新館(お城の本丸)に着任。 廃藩置県。
1872 グリフィス、福井を去る。 綱常、ドイツに留学(～77 年)。
1878 綱維(38)、大阪鎮台病院院長に就任後、まもなく亡くなる。
1881 県立福井中学、発足。
1882 梅尾、亡くなる。
1885 綱常、軍医総監に就任。翌年、日本赤十字の初代院長に就任。
1909 綱常、亡くなる。 前年、グリフィス、日本政府より叙勲される。
1927 グリフィス(85)、福井を再訪。左内の墓所に参る。
1928 グリフィス、死去。 ※年表内年齢は数え年です。